

平成音楽大学とハイブリッド・オーケストラ

ーその歴史とオペラ「魔笛」公演から見えてくるものー

中村真貴 西林博子（平成音楽大学）

進行：森下絹代 書記：西山淑子（文責）

【ハイブリッド・オーケストラの定義】

ここでは、電子オルガン（電子楽器）と管弦打楽器のアンサンブルとする。

8/19,21,26,28,29 電子オルガンセクションの合わせ。弦パートのサウンドの確認。

【平成音楽大学のハイブリッド・オーケストラの歴史】

1996年 オペラ『おてものバツテン嫁入り』

電子オルガン×1 + 打楽器アンサンブル

8/29 管打楽器の稽古見学。

1999年 オペラ『細川ガラシャ』

電子オルガン×4 + 弦×5（各1） + 管弦楽団

8/24,31,9/14,21 「魔笛」稽古見学。

2007年 オペラ『南風吹けば楠若葉』

電子オルガン×1 + 打楽器アンサンブル

（共に作曲・指揮：出田敬三）

9/6,7,14,21 オーケストラ合わせ。通し稽古。弦楽器との音の広がりを出すため、ピッチを441.8Hzに設定。弓使い、発音のタイミングなどチェック。

ここで重要なのは、ハイブリッド・オーケストラを用いる目的が、少ない人数で「大編成の生オケに似せる」ことではなく、この演奏形態ならではの新しい響きの追求にあるということ。

10/2,3 ゲネプロ。

そして成功の鍵は、出田先生がいるが故に、大学に新しいオペラを生む力があることと、作曲家自身の指揮によること、卓越した奏者がいたことである。

10/4,5 本番。

弦楽器と素晴らしくよく馴染み、綺麗だったと好評だった。

【オペラ「魔笛」～肥後くまもと魔法の笛～】

編成：電子オルガン×3 + 弦×6のハイブリッドストリングス + 管打楽器

2014年10月の公演に向けての準備の詳細。

【最後に出田敬三先生のコメント】

ハイブリッドオケは、代用ではなく新しい楽器を使っている新たな展開である。

最近では、宝塚や劇団四季でも活用しており、芸能界でもキーボードが活躍している。また海外（アジア）へも広がっているが、日本はリーダーとならなければいけない。

5月 パート分け。

第1オルガン：中村真貴 Vln. I, II

第2オルガン：川元慶子 Vln. II, Vla.

第3オルガン：本田真弓 Vc.,Cb.

プレーヤーの育成も大切。

音楽教室の講師になっても、教えるだけでなく演奏、咲く・編曲にチャレンジし、ソロだけでなく、歌、踊り、などに広げ、新たな展開をしてゆくことが大切。他ジャンルとの融合、コラボは最も大事。

8月 電子オルガン奏者で数回打ち合わせ。

業界の問題もあり、各地域では活動しているが広がって行かない。電子オルガン界の唯一の媒体である「月刊エレクトーン」への働きかけもこれからの課題。

8/14 出田先生によるレッスン。

オルガン3台での合わせ。稽古ピアニストとの合わせ。アインザッツ、発音、音量、音質など。

若手～中堅～ベテラン、みんなで電子オルガンを取り巻く環境（音楽教育）をどう作って行くかが我々の役目である。